

広島大学学術情報リポジトリ (HiR) のコンテンツ収集戦略

－機関リポジトリを育て続けるために－

尾崎 文代, 上田 大輔

抄録：広島大学では、2006年4月に機関リポジトリである広島大学学術情報リポジトリ (HiR) を立ち上げ、2006年12月6日現在で1,945件の教育研究コンテンツを公開している。本稿では、私たちが行った研究者への個別訪問による初期コンテンツの収集について、また、学内刊行物の収集やデータベースを用いた最新論文の提供依頼、機関リポジトリ活用のための工夫などによって継続的にコンテンツを収集し、機関リポジトリを育て続けていくための戦略について述べる。

キーワード：機関リポジトリ, 広島大学学術情報リポジトリ, HiR, コンテンツ収集, オープンアクセス

1. はじめに

広島大学では2004年末から機関リポジトリ設置の検討を行い、約1年半の準備期間を経て2006年4月に広島大学学術情報リポジトリ：Hiroshima University Institutional Repository (以下HiRという)の試験公開、さらに半年後の10月に正式公開を行った¹⁾。

HiRでは、2006年12月6日現在で533件の学術雑誌論文、1,237件の学内刊行物を含む1,945件の教育研究成果が公開されている。その多くは準備期間中に収集した初期コンテンツであるが、HiR立ち上げ後に収集したコンテンツも徐々にではあるが増加している。

本稿では、私たちがこれらの初期コンテンツをどのようにして収集したのか、また現在どのようにして継続的にコンテンツを収集するための活動をしているかを中心に紹介する。

2. 初期コンテンツの収集

ここで述べる初期コンテンツとはHiR公開準備期間中に収集を行った資料である。HiRにより多くの初期コンテンツを掲載するには、既に電子化されており、著作権の許諾も得ている研究紀要の論文を収集するのが早道である。広島大学でも、国立情報学研究所 (以下、NIIという)の学術雑誌公開支援事業 (平成14年当時は「研究紀要公開支援事業」)²⁾で電子化されていた研究紀要の論文を登録した。しかし、以下では、初期コンテンツのうち、研究者から直接提供されたものについて述べる。

2.1. リポジトリを知ってもらうために

広島大学では初期コンテンツを収集する前に、学内の研究科や学部へ機関リポジトリの説明と協力依

頼を行った。それは、少しでも多くの研究者に図書館が機関リポジトリを立ち上げようとしていること、そして、それには各研究者の協力が不可欠であることを知ってもらうためである。説明は、学内のすべての研究科長・学部長への個別説明のほかに、教授会での説明を約10回とキャンパスごとに全体的な説明会を行った。

説明会では、無料で公開されている論文の引用回数がそうでない論文に比べて増加する傾向にあること³⁾や機関リポジトリが新しい研究成果の発信ルートとなるといった研究者のメリットを強調するとともに、研究者がコンテンツを提供しやすくするために、著作権の許諾確認や機関リポジトリへの登録はすべて図書館で行うことを中心に説明を行った。

多くの研究者にとって「リポジトリ」は、聞き慣れない言葉であり、馴染みのない言葉に対する抵抗感がある。そのため、千葉大学の「CURATOR」⁴⁾や北海道大学の「HUSCAP」⁵⁾のような分かりやすく、誰もがすぐに覚えられる愛称を作ってはどうかという意見も出たが、残念ながら「CURATOR」や「HUSCAP」のような秀逸な愛称を誰も思いつかなかったこと、図書館長の「今はリポジトリという言葉は研究者にとって馴染みがないかもしれないが、世界レベルで機関リポジトリが発展していった時に、リポジトリという言葉を知らなければ世界の研究者と話が通じないではないか」という意見もあり、あえてリポジトリという言葉在前面に出してアピールすることにした。

そして、リポジトリを説明会だけでなく様々な会議で説明したり、依頼文書や広報用のチラシを何度も配布したりして、馴染みのないリポジトリという言葉はどこかで聞いたことがあったり、目にしたことがある言葉に変えていくように努めた。

最近、ある研究者に論文提供の依頼を行ったところ、「自分と同じ分野で他大学に勤めている研究者から機関リポジトリに論文を提供したという話を聞いたので、自分も非常に興味がある」との回答があった。これは、図書館からの情報ではなく研究者同士のネットワークでリポジトリが広まりつつあることを示しており、リポジトリという言葉も数年後には電子ジャーナルやデータベースと同じくらい研究者にとって身近な存在になるかもしれない。

2.2. 個別訪問によるコンテンツの収集

初期コンテンツの収集は、2005年12月から開始し、翌年4月の試験公開までの4ヶ月で1,000件のコンテンツを集めることを目標にした。これは、ある程度の量を集めることによってHiRの存在感を強調し、HiRを学内外へアピールするためであった。

私たちは、学内の研究者を対象にして多くの個別説明や説明会などを行ってきた。しかし、研究者にリポジトリを知ってもらうことが、必ずしも研究者からのコンテンツの提供につながるわけではない。実際にグラスゴー大学でも「教員たちの多くは、たとえ共感したとしても、コンテンツを提供する時間も気もない⁶⁾」といったことを経験している。

そのため、研究者からコンテンツを収集するためには、ただコンテンツが来るのを待っているだけではなく、一人一人の研究者と実際に顔をあわせて話をする必要があると判断し、研究者を個別訪問してコンテンツを収集するためのコンテンツ収集専任チーム（以下、収集チームという）を設置した。収集チームは、中央図書館2名と各分館それぞれ1名の合計5名の図書館職員で結成され、それぞれが担当の部局を持ち、個々の研究者に営業活動を行った。1人あたりの担当は4～7部局、研究者数では約160人～500人であった。収集チームの行った主な活動を以下に挙げる。

- (1) 事前準備
 - ・説明資料の作成
 - ・担当する研究者名・連絡先などの調査
 - ・担当する研究者の論文調査
- (2) 個別訪問交渉作業
 - ・個々の研究者への電子メールによる個別訪問許可依頼
 - ・図書館に来館した研究者に直接交渉
 - ・知り合いの研究者に直接交渉
- (3) 個別訪問
 - ・説明
 - ・質問回答

- ・コンテンツまたは文献リストの収集
- (4) 確認・登録作業
 - ・著作権調査
 - ・出版元への直接問合せ・交渉
 - ・研究者への回答
 - ・コンテンツの登録

様々な方法でなるべく多くの研究者に個別訪問の交渉を行ったが、研究者からはあまり積極的な回答は返ってこなかった。7部局の研究者458名に個別訪問をしてもよいかという電子メールを送ったところ、返事があったのはわずか37名だけであった。また、部局の事務職員から研究者に連絡をしてもらった場合でも、127名の研究者のうち回答があったのは5名のみであった。

実際に個別訪問を行い、話を伺った研究者からは、「自分の論文を公開してもらえるのはありがたい」「定年前に自分の集大成となる論文を書きたいと思っているので、それを定年後もずっと保存してほしい」「授業に活用できるような資料を登録してもらえるとありがたい」といったリポジトリに対する好意的な意見もあったが、「電子ジャーナルで公開されているのに重複して公開することに意義があるのか」「現時点では登録の必要性を感じない」「リポジトリは無駄である。研究者は、必要な論文はお金を払っても買うし、著者本人に連絡すれば別刷りやPDFを入手できる」といった否定的な意見も少なからずあった。したがって、当然ながら個別訪問にこぎつけたとしても、必ずしもすべての研究者からコンテンツを提供してもらえるわけでもなく、医学系の部局では、22名の研究者を個別訪問したが、実際にコンテンツの提供があったのは11名であった。

このような厳しい状況の中で、数少ない協力的な研究者から提供された論文の多くは、雑誌論文の電子ジャーナルファイルか別刷であった。雑誌論文の電子ジャーナルファイルや別刷といった出版社が作成したフォーマットは、多くの海外出版社・学会では機関リポジトリでの公開が許可されていない。したがって、これらの雑誌論文の多くはHiRで公開することができなかった。また、国内出版社・学会へも雑誌論文のリポジトリでの公開に対する許諾を確認したが、回答が全くない、または方針が未定のため公開ができないものも多かった。2005年12月から2006年3月末までに研究者から提供された雑誌論文のうち、著作権者である出版社や学会からHiRでの公開が認められ、2006年4月12日の試験公開時に実際に公開できたものの割合は36.6%であった(表1)。

表1 初期コンテンツの公開割合

| コンテンツの種類 | 獲得 件数 | 公開 件数 | 公開割 合(%) |
|---------------------|----------|----------|-------------|
| 雑誌論文 | 1,065 | 390 | 36.6 |
| 学位論文 | 37 | 31 | 83.8 |
| 修士論文・卒業論文 | 2 | 2 | 100.0 |
| プレプリント | 8 | 8 | 100.0 |
| 会議録・講演資料 | 79 | 43 | 54.4 |
| プレゼンテーション資料 | 5 | 5 | 100.0 |
| テクニカルレポート・ワーキングペーパー | 1 | 1 | 100.0 |
| 図書 | 1 | 1 | 100.0 |
| 図書の章 | 5 | 4 | 80.0 |

2.3. 初期コンテンツの収集から得た経験

初期コンテンツの収集時においては、当然ながら研究者のリポジトリに対する認知度は低い。その中でリポジトリに興味を持ち、コンテンツを提供してくれる賛同者を逃さずに獲得することが重要である。なぜなら、この時点での賛同者は図書館の事業やオープンアクセス、または情報発信などへの関心が高いため、彼らを起点にしてインフォーマルなネットワークでの普及が期待されるからである。

また、多くの海外出版社・学会は、著者が作成した原稿ファイルであれば機関リポジトリでの雑誌論文の公開を認めているが、原稿ファイルを保存している研究者は極めて少なく、5年以上前の原稿ファイルを保存していたのは、50名以上のコンテンツ提供者のうちわずか1名だけであった。ほとんどの研究者は原稿ファイルについてはあまり関心を持っていない。彼らが保存しているのは、原稿ファイルではなく電子ジャーナルのファイルであり、別刷である。したがって、機関リポジトリでの公開に原稿ファイルが必要な雑誌論文の収集は、最近出版されたものや今後執筆されるものを対象とし、過去の雑誌論文の収集は電子ジャーナルファイルや別刷での公開を許可しているものだけとするというような切り分けが必要である。

私たちが行った個別訪問によるコンテンツ収集方法は、多くの労力が必要であり、誰もがいつでも行える方法ではない。また、提供されたコンテンツは、調べてみたが結局登録できないというものも多く、決して効率の良い収集方法とはいえない。しかし、人文科学・教育学・社会科学・理工学・医学といった幅広い分野の多様なコンテンツを収集することが

できたし、個別に問い合わせを行った半数近くの学会や出版社から登録の許諾を得ることもできた。そして実際に研究者と会って話を聞き、研究者のニーズやリポジトリに対する考え方を知ることができたことは、非常に有益なことであったと思う。

3. 継続的なコンテンツの収集

以上のようにして初期コンテンツをとりあえず揃え、公開に至ったHiRである。

これでひとまず最初の「産みの苦しみ」は通過した。しかし、ほっと安堵している間もなく次の課題が待ち構えていた。

機関リポジトリとは構築して終わりではなく、育て続けること、つまり、いかにして継続してコンテンツを増やしていくかということに成功の鍵が存在する。Mark Ware Consultingの報告書では、新規コンテンツの獲得は、リポジトリ立ち上げ後1ヶ月では約2,000件だが、2ヶ月目以降は0から500件の間に止まることが指摘されており、世界のどのリポジトリにおいても継続的なコンテンツ確保は、立ち上げよりも難しいことが伺える⁷⁾。

わがHiRでも、立ち上げ後のコンテンツ増加率は図1のとおりであり、上記報告書を実証づける例であることは否めないが、わずかながらもコンテンツを増やし続けるための、私たちの試行錯誤を以下に記す。

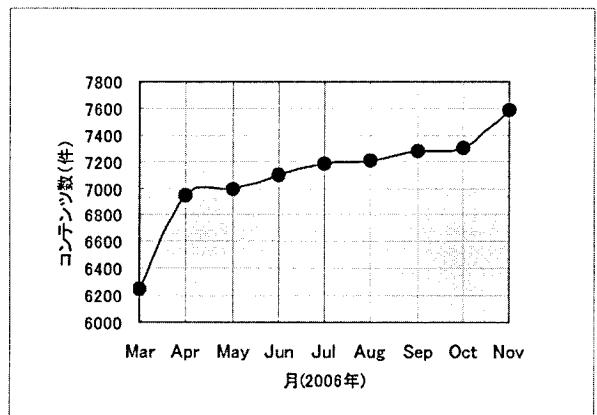


図1 2006年のHiRコンテンツ増加曲線

3.1. 学内刊行物を集める

前章で述べたように、平成14年度からNIIで行われている「研究紀要公開支援事業」に広島大学も参加しており、平成17年度にNIIへ提出した学内刊行物は27誌であった。

NIIからこの電子化された学内刊行物の論文データを入手し、HiRの初期コンテンツとして流用したことも既に述べたとおりである。

平成18年度からもこの事業に参加するかどうか検討した結果、今後はNIIへ電子化を依頼するのではなく、HiRのコンテンツの一つとして学内刊行物を自機関で収集・電子化し、そのメタデータをNIIが収集(ハーベスト)して流通性(認知度・露出度等)の向上をはかる方向にシフトしていくのが望ましいとの結論に至り、平成18年度からは、次のようにして作業を進めた。

まず、平成17年度に「研究紀要公開支援事業」に参加していた紀要編集委員会には、HiRへのコンテンツの提供をお願いした。さらに、それ以外の研究紀要編集団体へ学内電子掲示板・メール等で学内刊行物の電子ファイルまたは冊子体の提供を依頼した。また、著作権処理の済んでいるものはバックナンバーも提供してほしい旨の依頼も行った。このとき、次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業委託事業⁸⁾の領域2(先端的研究開発領域)の採択テーマ「電子出版システム(編集査読システム)の開発」(早稲田大学主担当)を進めていくための協力者を獲得することをも視野に入れ、刊行物の成立要件(投稿の主体、投稿様式の規程、査読の回数・主体、組版の主体、発行部数、一号あたりの投稿件数・採択件数、発行予算、著作権規程、その他電子出版に対する意見や希望など)についてのインタビューによる調査も併せて行った。

以上の作業によって得た学内刊行物は、これまでのものと合計して39誌となった。そのうち6誌については著作権規程の調整を進め、創刊からのバックナンバーを提供してもらうことができた。広島大学の学内刊行物の総数から考えるとまだそのほんの一部であるが、今後も引き続き収集を拡大していきたい。

本学のある人文科学系研究科に博士論文の登録依頼に出かけた時のことであるが、研究科長から「当研究科では、博士論文を発展させて図書として出版することが多いので、そのままの状態で開催を希望する著者はほとんどいないのではないかと思われる。それよりも当研究科では、学内で発行する紀要・研究会誌などの刊行物を登録・公開する方が価値が大きいし喜ばしい」と伺ったことがある。

確かに本学でも、専攻によって学内刊行物の公開に対する考え方はさまざまであり、また、オープンアクセスの理念を先行させると、機関リポジトリのコンテンツとしては商業雑誌・学会誌の査読済み論文を主眼に考えがちである。しかし、機関リポジトリは「自学の研究成果を公開する場」「研究成果のショーウィンドウ」であるというキャッチフレーズのとおり、まず、学内の刊行物をきちんと押さえて

おくことが肝要と考え、これからも学内刊行物の収集・公開に努めていきたい。

3.2. 新しいものをもらう

初期コンテンツを収集した時の私たちのスローガンは、「もらえるものは何でももらう。もらったものは何とかして入れる」であった。

短期間の立ち上げ作業では、各コンテンツの著作権許諾状況を確認した上で論文提供してもらうという余裕がなく、「とりあえず何でもください。著作権についてはこちらで調べます」という方法を取った。

これによってある程度の件数(公開当時の件数:コレクション類を除き1,357件)を集めることができ、初期コンテンツ構築としてはとりあえず一定の成果が上げられたと言うことはできるが、この方法が継続性につながらないのは明らかであった。

2006年4月12日にHiRを試験公開した後、私たちの目の前に積まれていたのは、登録できなかったため研究者に返却する電子ファイルと別刷りの山であった。これを返却することで研究者の熱意がさめるのは目に見えており、先が思いやられた。

その後数ヶ月の間は、こちらからアプローチを行った、あるいは問い合わせのあった学内研究者について、学内の業績データベースでの論文調査・著作権の許諾確認、そしてリポジトリでの公開が可能な論文の提供依頼を行い、リポジトリでの公開に対する許諾が不明な論文は出版元に問合せ、という作業を続けた。

しかし、業績データベースの内容は研究者自身が入力するため、必ずしも新しいデータが登録されているとは限らず、研究者によっては数年前より更新されていないものもある。数年前に発行された論文でも、著者に問い合わせた結果、原稿ファイルや電子ファイルが残っていないことが多かった。また、登録可否が不明な国内の出版元への問い合わせは、「これから規程を作る」「理事会開催を待つ」あるいは「回答なし」という状況がなお継続していた。これらの作業から、いくばくかのコンテンツを得ることはできたが、必ずしも効率的なコンテンツ収集につながるには言い難かった。

以上のことから得た教訓は、

- (1) 発表後1年以上経過した論文の原稿は、著者の保存率が低い。
- (2) 何でもいいからほしいと言うと、研究者は選別が面倒でかえって提供してくれない。
- (3) せっかくもらったコンテンツを返却すると研究者の熱意は下がる。

である。

そこで2006年9月末、エルゼビア社が提供する二次情報データベースであるSCOPUSを「Affiliation: Hiroshima Univ* (著者所属: 広島大学)」「Published: 2006 to Present (出版年: 2006年)」という条件で検索し、その中からGreenジャーナル⁹⁾を抜き出して各々の著者に原稿ファイルの提供を依頼した。また、そのうち出版社が作成する電子ジャーナルファイルが公開可能な論文については、著者にHiRでの公開の許諾確認を行った。その結果、99件の文献提供依頼を行ったうち、3割強の37件の提供を受けることができた。

この理由として考えられることは、

- (1) 直近の論文であるため原稿保有率が高い。
- (2) この論文のこのテキストを、と指定するため、あるいは許諾だけを求めるため、研究者からも提供がしやすい。

である。

今回は試しにSCOPUSを利用したが、広島大学関係論文の搭載数は、1ヶ月で約70件であった。同じくWeb of Scienceでの搭載数は約120件であった。これらのデータベースを定期的に検索し、Greenジャーナルを選別して研究者に協力依頼を行うことで、一定のコンテンツ数を獲得することが期待されると考え、現在も少しずつ作業を行っている。2006年10月、このやり方の先鞭付けを行った北海道大学附属図書館運営の「北海道大学学術成果コレクション (HUSCAP)」の成果について、論文が発表された¹⁰⁾。同館では直近1週間の論文依頼作業を6ヶ月以上行い、多数のコンテンツ(依頼数の49%)を獲得するという顕著な成果を上げており、同論文に登場する「Not Just Any Paper, But a Specific Paper (「何でもいいです」ではなく、「これを)」というチャプタは、まさに「何でもいい」からHiRをスタートした後、継続収集に悩み試行錯誤している私たちに、大きな共感と勇気を与えてくれた。

3.3. 覚えた「リポジトリ」を思い出してもらう

2.1で述べたとおり、本学では敢えて「リポジトリ」という名前を前面に出してきた。ひととおり学内の全体説明会を終え、私たちは個別に各研究者に一齐にメールを送信、あるいは研究室を個別に訪問して説明を行ったが、その際に、研究者側の「リポジトリという言葉はなんとなく知っている」という感触を得ていた。馴染みのない言葉を敢えて刷り込むことで、詳細は伝わらないにしても言葉は覚えてもらったのではないかと考えているが、もちろん、

覚えただけで留まってしまっている研究者も圧倒的に多かった。立ち上げ期に直接交渉のできなかったこの多くの研究者に、数ヶ月後に再度全く同じプロモートをするのもあまり気が利いているとは言えないと考えていた。

今回、科学研究費補助金研究成果報告書の登録許諾依頼を242名の研究者に送付した。その際、おさらい程度にリポジトリの説明と現状を付け加えたところ、これまで交渉のなかった何名かの研究者から「提供しようと思っていたが忘れていた」「名前は覚えていたが機会がなかった」「詳細を教えてください」という嬉しい反応を得ることができ、当該報告書を公開可との許諾を得たものは96件ではあったが、結果的にはよい再アプローチの機会になった。リポジトリの趣旨はある程度理解していても、自発的にコンテンツを提供する研究者はほんの一部であり、このようなきっかけをこれからも再三再四作って交渉していくことが必要であると感じている。

4. 活用してもらうために工夫する

リポジトリコンテンツへのアクセスは、サービスプロバイダやサーチエンジンからの検索がそのほとんどを占めている。特定の大学のリポジトリを指定して検索する必要性は少なく、むしろ、サービスプロバイダへ、より多くのデータをハーベストされることこそが利用促進の大きな鍵であり、またそれによるアクセスが望ましいとも言える。であれば、個々のリポジトリではインターフェイスに凝ることはなく、データさえきちんと揃えて刈り取られるために貯蔵しておけばよい、という極論も成立し、また、それも一理ある。

しかし、一方で機関リポジトリは「大学のブランド力の向上につながる」という売り文句を掲げており、大学として注目されるための工夫も求められている。

そこで、広島大学HiRコンテンツを活用してもらうためのささやかな工夫として、以下の2点を考えている。

- (1) コンテンツをピックアップする。

HiR注目コンテンツ(図2)・区切りのよいカウント数のコンテンツ(キリ番)・特集ページ・主題別ページ。

- (2) 各種サイトのリンクリソースとしてコンテンツを活用する(シラバス、広島大学で開催された各種学会・会議・講演会等(図3))。

図書館が蓄積し整理し利用に供するリポジトリのコンテンツは、従来からの図書館資料と同様に考え

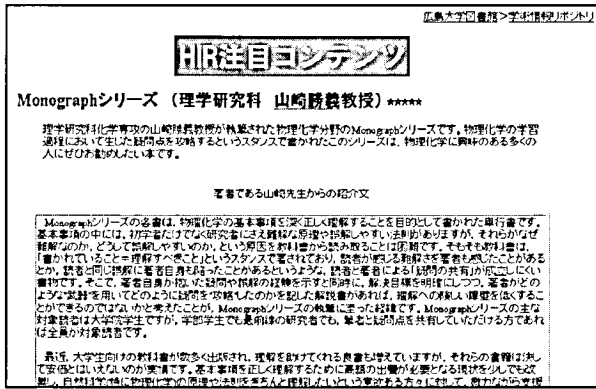


図2 HiR注目コンテンツ¹¹⁾

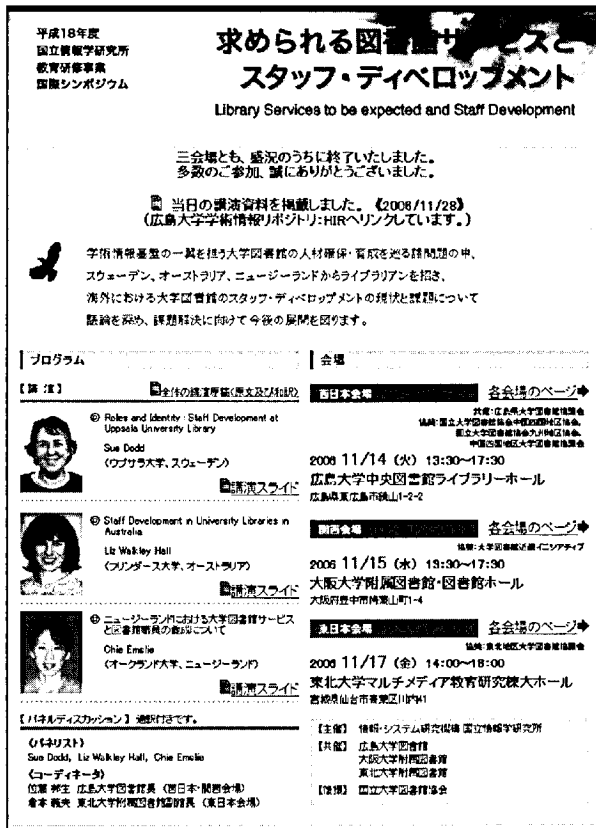


図3 国立情報学研究所国際シンポジウム¹²⁾

講演資料はHiRコンテンツである

ることでもできる。異なるのは、サーバに格納されたデジタル資料であるため、たとえ貴重な資料であっても利用による劣化を心配せずにどんどん利用してもらうことができることである。コンテンツは利用・活用されてこそ意味のあるものとして、これからも多様なプロモーションを実行していきたい。

5. 特色のあるリポジトリを目指して

当初、私たちのコンテンツ収集方針は「もらえるものは何でももらう。もらったものは何とかして入れる」のみであった。しかし、ただそれだけではなく、今後HiRがどのような役割を担い、どのような

リポジトリを目指すのか、そしてそのためにはどのようなコンテンツを重点的に収集したらよいかをこれまでの経験を踏まえて再検討した。その結果、今までと同じように多様なコンテンツの収集を行い、幅広い分野のより多くの研究者や学生に利用されること、そして広島大学でしか集められないコンテンツの収集に力を入れ、広島大学として特色のある機関リポジトリを目指すことにした。

現在、幅広い分野の教育研究活動を支援するために雑誌論文の他に、科学研究費補助金の研究成果報告書と博士論文の収集にも着手している。この二種の資料は、各種のデータベースやホームページ等で題名は公開されているが、本文の入手が困難な資料の最たるものであり、本学図書館のみならず全国の図書館で担当者が非常に苦勞している資料である。これらの資料をリポジトリで公開することによって、多くの利用者に大きな恩恵を与えることができると考えているが、実際の登録作業は、一件一件の文献について慎重に著作権を確認する必要があり、相当な労力のいる作業として難航している。ゆえに、科学研究費補助金のような公的助成による成果物は、リポジトリへの登録を義務化して広く一般に公開することが望ましい。

また、研究室で発行している研究会誌のような配布範囲が限られている資料も、リポジトリで公開することにより、潜在的な読者を開拓できる可能性があるため、リポジトリでの公開に向けて積極的な広報・収集活動を行っていききたい。

さらに、HiRが特色のあるリポジトリとなるために、現在平和学に関連する様々な資料を収集した平和学リポジトリの構築を行っているところである。これは本学の理念の一つである「平和を希求する精神」を実現するとともに、平和学の研究や教育への貢献と、平和に関心のある多くの学生や一般の方に利用してもらうことを目指している。本学の平和科学研究センターの研究紀要や報告書(すでにHiRで公開済)の他に、平和学関連の講演会資料や講義資料、スウェーデンにあるストックホルム国際平和研究所が発行している平和関連資料の日本語翻訳版などを公開する予定である。

現在HiRで公開されている特色のあるコンテンツでは、先に述べた平和学関連資料の他に、「Monographシリーズ」(全17冊)がある。これは物理化学分野の学習参考書であるが、冊子体として出版されたものではなく、著者のウェブページとHiRから公開されているだけである。この「Monographシリーズ」はHiRの中で最もアクセスされている資料であり、研究だけでなく学習の面でも機関リポジ

りが必要とされていることがわかる。

また、ある研究者から「出版する予定がない自分の論文集をリポジトリに登録したい。自分の研究分野は研究者の少ない分野であり、今は誰も見てくれないかもしれないが、50年後に自分の論文を必要とする研究者が現れるかもしれない」との連絡もあった。このような、従来の冊子体の出版ではできないことで機関リポジトリにできることは多くあり、それを望んでいる研究者も少なくない。このような研究者のニーズを捉え、HiRで実践していくことによって、より多様で特色のあるコンテンツの形成が可能となるであろう。

6. おわりに

以上、広島大学において行ってきた、そして現在行っている機関リポジトリのコンテンツ収集について述べた。広島大学では機関リポジトリの構築が終わり、これからこの機関リポジトリをどうやって育てていくかという段階に入っている。どうすれば効率よくコンテンツを集めることができるのか？研究者にどのようなアプローチを行えばよいのか？研究者がすすんでコンテンツを提供してくれるにはどうしたらよいのか？といったような問題を抱えながらも、現時点では地道にこつこつと研究者にコンテンツの依頼を行い、彼らの理解・信頼・協力を得るべくコンテンツ収集活動に励んでいる。

NIIが行っている平成18年度の次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業の領域2（先端的研究開発領域）では、リンクリゾルバとの相互運用による利用者ナビゲーション、業績データベースと機関リポジトリとの連携、著作権ポリシーの共有機能など、様々な方法でコンテンツの収集を促進・支援するプロジェクトが立ち上がっており、これらの成果は、今後の私たちのコンテンツ収集活動にいっそうの力を与えてくれるものとなるであろう。

そして、いつか機関リポジトリが電子ジャーナルやデータベースのように研究者や学生にとって、なくてはならない存在になる日のために、コンテンツの質と量を充実させていくことこそが現在の私たちの使命であると考えている。

注記・引用文献

- 1) 広島大学学術情報リポジトリ <<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/portal/>>, (参照 2006-12-05)
- 2) 国立情報学研究所 学術雑誌公開支援事業, <<http://www.nii.ac.jp/nels/>>, (参照 2006-12-05)
- 3) Harnad, Stevan. Comparing the impact of Open Access (OA) vs. Non-OA articles in the same

journals. D-Lib Magazine. vol.10, no.6, 2004. (online), available from <<http://www.dlib.org/dlib/june04/harnad/06harnad.html>>, (accessed 2006-12-05)

- 4) CURATORの正式名称は千葉大学学術成果リポジトリ：Chiba University Repository for Access to Outcomes from Researchである。<<http://mitizane.ll.chiba-u.jp/curator/>>, (参照 2006-12-05)
- 5) HUSCAPの正式名称は北海道大学学術成果コレクション：Hokkaido University collection of Scholarly and Academic Papersである。<<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/>>, (参照 2006-12-05)
- 6) Mackie, Morag. Filling institutional repositories : Practical strategies from DAEDALUS Project. Ariadne. Issue 39, 2004. (online), available from <<http://www.ariadne.ac.uk/issue39/mackie/>>, (accessed 2006-12-05) 日本語翻訳版. 入手先 <<http://www.nii.ac.jp/metadata/irp/mackie/>>, (参照 2006-12-05)
- 7) Mark Ware Consulting Ltd. Pathfinder research on web-based repositories. (online), available from <<http://www.palsgroup.org.uk/palsweb/palsweb.nsf/0/8C43CE800A9C67CD80256E370051E88Alopocument>>, (accessed 2006-12-05)
- 8) 国立情報学研究所 次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業 <<http://www.nii.ac.jp/irp/>>, (参照 2006-12-05)
- 9) 出版社が論文のセルフアーカイブ（リポジトリへの登録を含む）を認めている雑誌のこと。<<http://www.sherpa.ac.uk/romeo.php>>, (accessed 2006-12-05)
- 10) Suzuki, Masako ; Sugita, Shigeki. From nought to a thousand : The HUSCAP Project. Ariadne. Issue 49, 2006. (online), available from <<http://www.ariadne.ac.uk/issue49/suzuki-sugita/>>, (accessed 2006-12-05)
- 11) HiR 注目コンテンツ第1回「Monographシリーズ」 <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/portal/hot/contents_1.html>, (参照 2006-12-05)
- 12) 平成18年度国立情報学研究所教育研修事業国際シンポジウム。“求められる図書館サービスとスタッフ・ディベロップメント” <<http://www.nii.ac.jp/hrd/sympo2006/>>, (参照 2006-12-05)

参考文献

- 1) 阿蘇品治夫. 機関リポジトリを軌道に乗せるため為すべき仕事：千葉大学の初期経験を踏まえて. 情報

- 管理. vol.48, no.8, 2005, p.496-508.
- 2) 高木元. 研究者にとってのセルフアーカイビング. 情報の科学と技術. vol.55, no.10, 2005, p. 巻末1-4.
 - 3) 高木元. 学術情報リポジトリと人文系基礎学. 千葉大学附属図書館報InfoPort. vol.7, 2003. p.5 入手先 <<http://www.ll.chiba-u.ac.jp/publication/culb/infoport/007.pdf>>, (参照 2006-12-05)
 - 4) Foster, Nancy Fried ; Gibbons, Susan. Understanding faculty to improve content recruitment for institutional repositories. D-Lib Magazine. vol.11, no.1, 2005. (online), available from <<http://www.dlib.org/dlib/january05/foster/01foster.html>>, (accessed 2006-12-05) 日本語翻訳版. 入手先 <<http://www.nii.ac.jp/metadata/irp/foster/>>, (参照 2006-12-05)
 - 5) Pinfield, Stephen ; Gardner, Mike ; MacColl, John. Setting up an institutional e-print archive. Ariadne. Issue 31, 2002. (online) available from <<http://www.ariadne.ac.uk/issue31/eprint-archives/>>, (accessed 2006-12-05) 日本語翻訳版. 入手先 <<http://www.nii.ac.jp/metadata/oai-pmh/eprints/>>, (参照 2006-12-05)
 - 6) 国立大学図書館協会国際学術コミュニケーション委員会, 国立情報学研究所. 研究活動及びオープンアクセスに関する調査報告書. (オンライン), 入手先 <http://www.nii.ac.jp/sparc/doc/oa_report_ja.pdf>, (参照 2006-12-05)

<2006.12.7 受理 おざき ふみよ 広島大学図書館部主査 (学術情報リポジトリ主担当), うえだ だいすけ 広島大学図書館部グループ員 (学術情報リポジトリ主担当) >

OZAKI, Fumiyo, UEDA, Daisuke.

Content recruitment strategies for Hiroshima University Institutional Repository (HiR) – To be a growing IR –

Abstract: Hiroshima University launched its institutional repository called Hiroshima University Institutional Repository in April 2006, and by December 6, 2006 it had made 1,945 items of scholarly research available to the public. This paper reports on the methods used to recruit content beginning with visiting individual faculty members, to requesting copies of university publications and recent articles in databases. A variety of innovations are necessary to recruit content on an ongoing basis so that the institutional repository can continue to grow and develop.

Keywords: institutional repositories / Hiroshima University Institutional Repository / HiR / content recruitment / Open Access